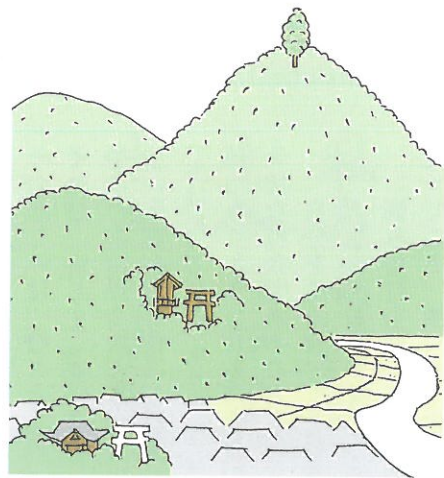


祖先との交流

日本人の靈魂観



人が亡くなれば、その肉体は滅びてしましますが、では魂は一体どうなるのでしょうか？

古くから日本人は、その行方に思いを巡らしてきましたが、少なくとも言えることは、亡き人の魂はいつまでもこの土地に留まって、愛しい人や子孫

とともに生き、その幸せを見守ってくれると信じてきたことです。

こうした伝統的な考え方は、今日さまざまなかたちで伝えられています。

例えば、自分の家や田畑に山の神さまをお招きする行事が各地で見られますが、これは山の神さまとなった祖先の霊が、恵みをもたらすために山から里に降りてくるという信仰があるからです。

祖先の霊が子孫の生活する地域近くの山頂に留り、時季を定めては子孫と交流するために降りてくると考えるのは、いつまでも自分たちの近くにいて見守って欲しいという素朴な願いの現れであり、地域からいつでも望むことのできる高い山上が、神々の聖地、祖先の永住地と信じられてきたことの証でしょう。

一方、お盆には「精霊流し」という祖先送りの行事が見られますが、海沿いの町や村には、祖先は海の彼方（常世の国）からやってくると考えられているところもあります。

アエノコト

石川県能登地方に伝わるこの行事は、毎年十二月に、一年間田を見守り恵みを与えてくれた神さまを各家にお招きして、収穫に感謝するおまつりです。

柿を着けた主人が、苗代田から家の祖霊とも言われる田の神を背負って家に迎え入れ、入浴していただいたり、座敷でご馳走を差し上げたりして、丁寧におもてなしをします。

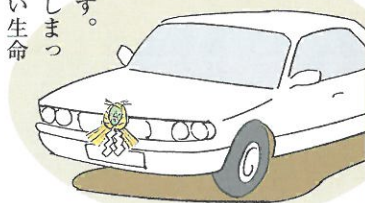
この祖先と子孫との和やかな交流に、日本人の祖霊観の一端を見る思いがします。



年神さま

年神さまは稲霊とも言われていますが、それは、日本人と稲との深いつながりがあるからです。

稲は枯れてしまっても初に新しい生命を宿し、それがやがて芽をふいて、稔りをもたらしてくれます。日本人は、年も稲と同じように、一年年新しく生まれ変わると考えてきたのです。



年（稲の稔りとし）が生まれ変わるということは、生命のつながりを確認することでもあり、日本人にとって大変におめでたいことだったのです。



祖霊と年中行事

日本にはたくさんさんの年中行事がありますが、その中にも祖先の霊を親しくおまつりする特別な日が少なくありません。

「盆と正月が一緒にきたようだ」とは、嬉しいことが重なった時などに使いますが、祖先の霊との交流が叶う日だからこそ、特別な日として大切にされてきたのです。

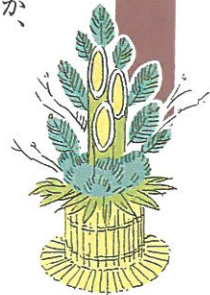
◆お正月

年末から大晦日にかけての慌ただしさが、

一夜明けて元旦ともなると、不思議と穏やかで清々しい気分になるものです。

新しい年を祝う正月は、日本人にとって最も身近な年中行事ですが、正月も古くは、祖先の霊を迎えてまつる行事でした。

正月には各家庭で門松を飾り、鏡餅



また、鏡餅は、もともと年神さまに供える

お供え餅のことを言い、このお供え餅をその他の供え物と一緒に煮たものが雑煮です。



年の初めに訪れる年神さまは、一年の幸をもたらしてくれると信じられ、正月はこのほか大切な行事でした。

◆ お彼岸

「暑さ寒さも彼岸まで」の言葉どおり、彼岸は季節の変わり目であると同時に、また、祖先をまつる大切な行事でもあります。

彼岸は、春分の日(三月二十一日頃)と秋分の日(九月二十三日頃)をはさんだ前後の三日間ずつ、計七日間のこととで、それぞれ春彼岸、秋彼岸といい、彼岸の最初の日を「彼岸の入り」、最後の日を「彼岸の明け」、春分・秋分の日を「彼岸の中日」と言います。

彼岸には、お墓参りをする習慣があり、祖先の霊を家に迎える盆とは違って、祖先に会いにゆく行事としての色彩が濃いようです。

仏教に由来する行事と考えられている彼岸は、日本にしかない行事で、豊作に欠かすことのできない太陽をまつり、祖霊の加護を祈る古くからの儀礼と結びついたものと言われています。



彼岸には「おはぎ」や「ぼたもち」を供え、お下がりとして食します。「おはぎ(御萩)」は萩の餅の略称、「ぼたもち」は牡丹餅で、いずれも同じものですが、春の牡丹、秋の萩と季節の花にたとえて呼ぶところに、日本人らしい感性がうかがわれます。

◆ お盆

盆は、旧暦七月十五日を中心に行われる祖先をまつる行事で、七月十三日夕方の迎え火に始まり、七月十六日の送り火に終わります。

一般に盆とは、盂蘭盆の略とされ、盂蘭盆には梵語で倒懸(さかたがり)になっているのを救うという意味があり、あの世で非常な苦しみを受けている死者を供養し救う仏教行事とされています。

しかし、供え物や載せる容器を日本の古語で「ボン」と言ったことから盆になったという説もあり、盆行事は、日本に古くからあった祖霊祭の名残であらうとも考えられています。

関東地方では七月十五日に行われることが多いようですが、関西など西日本では月遅れの八月十五日に行うところが多く、「おがら」と呼ばれ



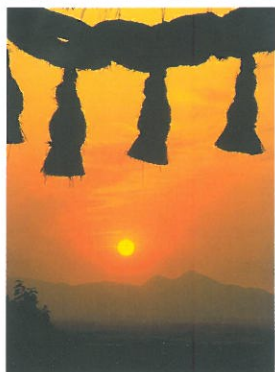
阿波踊り(徳島市)



る麻の茎や麦藁、松の割り木などを焼く迎え火・送り火の風習は、江戸時代に盛んになったと言われています。また、盆踊りは、本来、祖先の霊を慰め送り出すためのもので、あの有名な阿波踊りも盆踊りの一つです。

正月や盆など祖先の霊は年中いく度も子孫のもとを訪れます。正月棚や盆棚(先祖棚)はその際に祖先を迎える場所で、神棚や御霊舎の原型とも考えられています。

春分・秋分の日



春分・秋分の日、いずれも国民の祝日で、春分の日「自然をたたえ、生物をいつくしむ」、秋分の日「祖先をうやまい、なくなった人々をしのぶ」とされていますが、かつては春季皇霊祭・秋季皇霊祭という祭日でした。今でも、宮中では春季皇霊祭・秋季皇霊祭が行われ、神武天皇をはじめ歴代天皇・皇族の御霊がおまつりされます。

春分・秋分の日、天文学的には太陽が黄経0度(春分点)、一八0度(秋分点)を通過する日で、太陽が真東から昇り、真西に沈むことから、祖先との交流に相応しい日と考えられてきたでしょう。

七夕

七夕と言えば、笹竹に色紙や願い事を書いた短冊をつけて軒先に立てますが、これは、盆棚の旗飾りである「タナバタ」からきていると言われています。

また七夕は、七日盆・盆はじめとも言われ、水浴びの行事が多いことから、祖先の霊を迎える盆の前に、穢れを祓い清めるための行事であったようです。

